



今月の主な目次

- 乳価値上げは増産へのメッセージ
- シリーズ草地更新を考える① = 草地の現状 =
- 牧草種子の生産について ~種子生産の現場より~

時の話題

配合飼料原料動向と今後の見通し

先ずは、東日本大震災、そしてそれに伴う東京電力福島原子力発電所事故に際して、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。被災された方々におかれましては一日も早い復旧がなされることをお祈りしております。

さて、今年7~9月の配合飼料価格は、系統・商系加重平均1,398円/トンの値上げとなり、配合飼料価格の値上げは今年1月から連続3回(四半期)になります。3回連続の値上げの合計は、系統・商系平均値で6,961円/トンになり、4~9月の配合飼料価格畜産安定基金の補填交付は4,700円/トンになっています。

その後の飼料原料の動向と今後の見通しについて若干ご紹介いたします。

とうもろこしは、米国農務省(USDA)が6月30日に発表された作付面積予想と全米穀物在庫の数字はいずれも市場予想を大幅に覆すサプライズな数字となってシカゴとうもろこし定期は一時6ドル40¢/ブッシェルまで急落しました(右下グラフ)。その後、米国農務省が7月12日に11/12穀物年度(11年9月~12年8月)の需給見通しを発表し、とうもろこしの総需要量を6月の予測から1.8%増の135億ブッシェルと上方修正し、米国でのエタノール需要と輸出需要が伸びると見込みました。この総需要量は、史上最高を予測した生産量134億7000万ブッシェルを上回った値で、これによって7月13日の終値では7ドル26¢の値をつけました。

シカゴ相場は6月10日には7ドル99¢と8ドルに迫る勢いを見せていたものの、6月30日には米国農務省が公表した作付面積の増加予測を受けて7月1日の終値は6ドル40¢まで下落しました。それが今度は半月の間に1ドル近く反発した訳です。米国農務省の発表に対し投資家含めた市場は敏感に反応し、資金の投入や引き上げが頻繁に繰り返され、相場が大きく動いているのが現状です(7月後半は7ドル/ブッシェル弱で推移)。また、米国コーンベルト地帯のとうもろこしの生育状況は、現在ホット&ドライに見舞われ気温も35-38度と高いレベルになっています。ポリネーション(受粉期)真っ最中ということもあり、天候リスクが収穫量に大きく影響する時期にさしかかっています。

蛋白質原料の大豆粕は、米国産大豆の作付が進み、南米産大豆の収穫が順調であることや中国向け輸出がやや低調なことから、シカゴ相場もやや弱含みの展開

となっています。また、国内での搾油量の減少から国内産大豆粕の発生量は少なくなっているものの、輸入大豆粕での対応が進んでおり、需給は安定しています。今後の値動きは円高推移もあり前期に比べやや弱含みと予測されます。

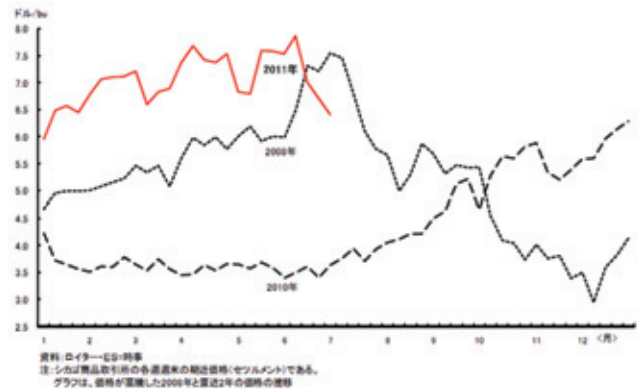
糟糠類は、フスマ、グルテンフィードともに原料である小麦、トウモロコシの価格が上昇しており、需給は安定しているものの、今後の動きは強含みと予測されます。

哺育飼料主原料の脱脂粉乳は、新興国の需要拡大など国際的需要の高まりで、国際価格は上昇しています。今後の値動きは、こうした旺盛な国際需要を背景に堅調に推移するものと予測されます。

海上運賃は、経済発展を進める中国の旺盛な船腹需要や、原油価格の高騰により、堅調な値動きとなっています。今後についても、燃料コストの上昇や中国の石炭需要等が堅調であり、これからの10~12月は北半球が冬場を迎え燃料が高騰しやすく海も荒れるという点(航海日数が増える)で強含みの値動きが予測されます。

外国為替については、米国内での失業率の高まりや経済指標の悪化など、米国経済の回復が見られずまた、米国債券のデフォルト(債務不履行)の懸念もあり、現在は70円後半の円高水準で推移しています。また、今後の外国為替の動向については、わが国の大震災後の経済復興の停滞もあり、不透明感の強い展開となっています。

この様なことから次期10~12月の配合飼料価格の動向は不透明になってきており、この先も厳しい相場展開を予想させざるを得ない状況で、世界の穀物需給は極めて厳しく、国産飼料強いては自給飼料の増産への施策が一層求められます。以上



(農水省HPより抜粋)
(取締役飼料部長 久保 孝)